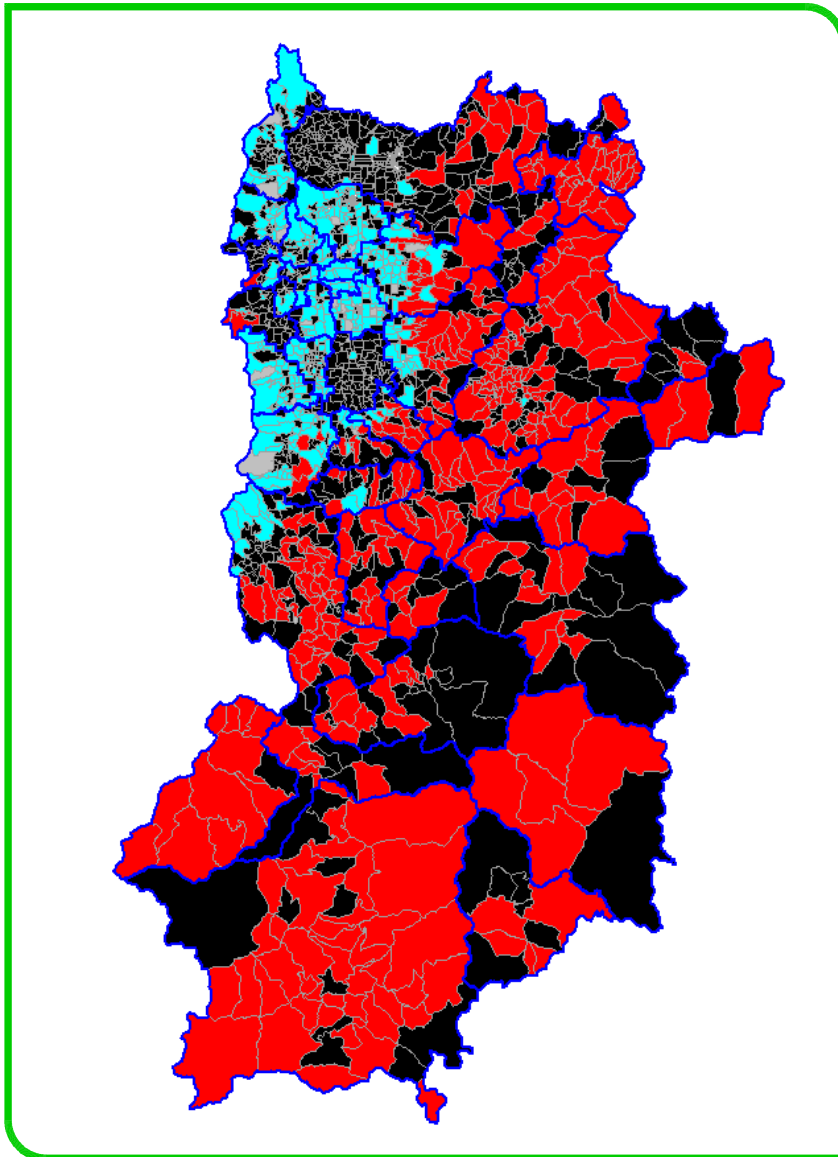


農業・林業集落アンケート調査によるシカの生息状況・被害状況(平成28年度)

1. 平成28年度農業・林業集落アンケート調査によるシカの分布



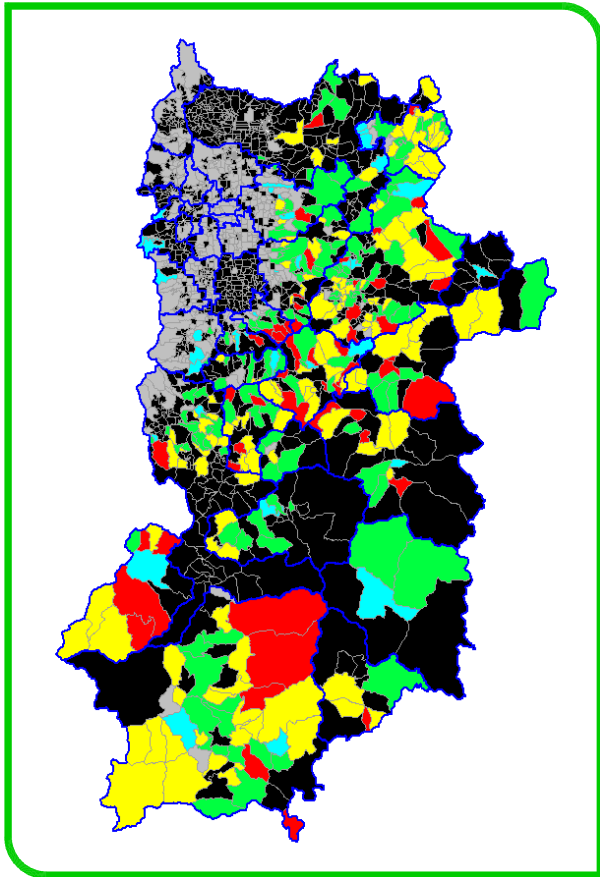
図は平成28年度の農林業集落アンケート調査による、シカの分布である。

農業、林業の両方、またはいずれかのアンケートで、シカが「いる」と回答があった場合に「分布している」とした。回収無しには既に人が住んでいない集落も含まれている。

県北西部の奈良盆地や生駒山系を除いた、県北部から県東部・南部にかけての広い地域から、シカが「いる」との回答があった。なお、奈良盆地西部付近で分布の見られるようになった。

凡例 図中 青線 市町村界 市町村界内側の線 大字・地区界
なお、この市町村界、大字・地区界の凡例は次項以降の図も同様である

2. シカの農業被害の大きさ



左図は平成28年度の農業集落アンケートによる、農業被害の大きさの意識調査の結果である。

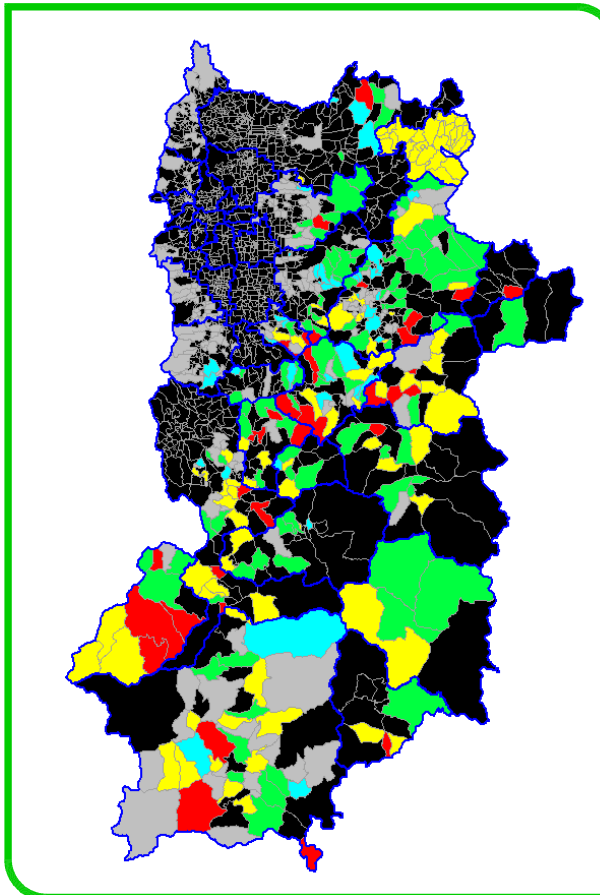
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった集落の内訳は下記の通りである。

被害が「大きい」又は「深刻」と回答しているものが、併せて約49%あり、シカによる農業被害意識は大きいことがわかる。また、「軽微」という回答を併せると、被害認識は約90%に上り、多くの地域でシカによる農業被害が生じていることがわかる。

・平成28年度	
ほとんど無い	37集落 (9.9%)
軽微	155集落 (41.3%)
大きい(生産量の30%未満)	131集落 (34.9%)
深刻(生産量の30%以上)	52集落 (13.9%)
回答数	375集落

・参考)平成27年度	
ほとんど無い	35集落 (10.4%)
軽微	118集落 (34.9%)
大きい(生産量の30%未満)	121集落 (35.8%)
深刻(生産量の30%以上)	64集落 (18.9%)
回答数	338集落

3. シカの林業被害の大きさ



左図は平成28年度の林業集落アンケートによる、林業被害の大きさの意識調査の結果である。

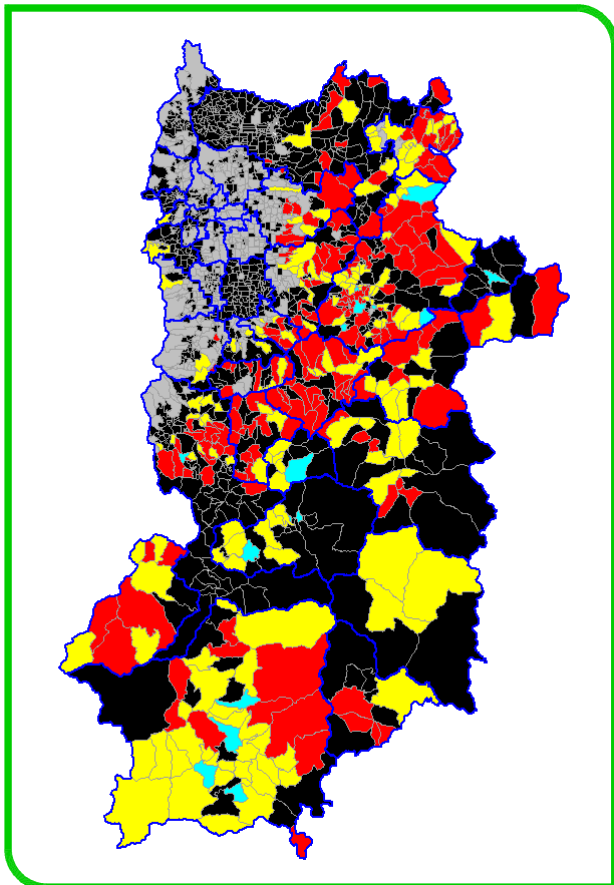
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった集落の内訳は下記の通りである。

前年度と同様、被害が「大きい」又は「深刻」と回答しているものが、併せて約48%に上り、シカによる林業被害意識は大きいことがわかる。また、「軽微」という回答を併せると、被害認識は約86%に達し、県内の多くの地域でシカによる林業被害が生じていることがわかる。

・平成28年度	
ほとんど無い	38集落 (14.4%)
軽微	99集落 (37.6%)
大きい(生産量の30%未満)	94集落 (35.7%)
深刻(生産量の30%以上)	32集落 (12.3%)
回答数	263集落

・参考)平成27年度	
ほとんど無い	34集落 (14.9%)
軽微	93集落 (40.8%)
大きい(生産量の30%未満)	73集落 (32.0%)
深刻(生産量の30%以上)	28集落 (12.3%)
回答数	228集落

4. シカの農業被害の増減



左図は平成28年度の農業集落アンケートによる、農業被害の前年と比較した被害増減の意識調査の結果である。

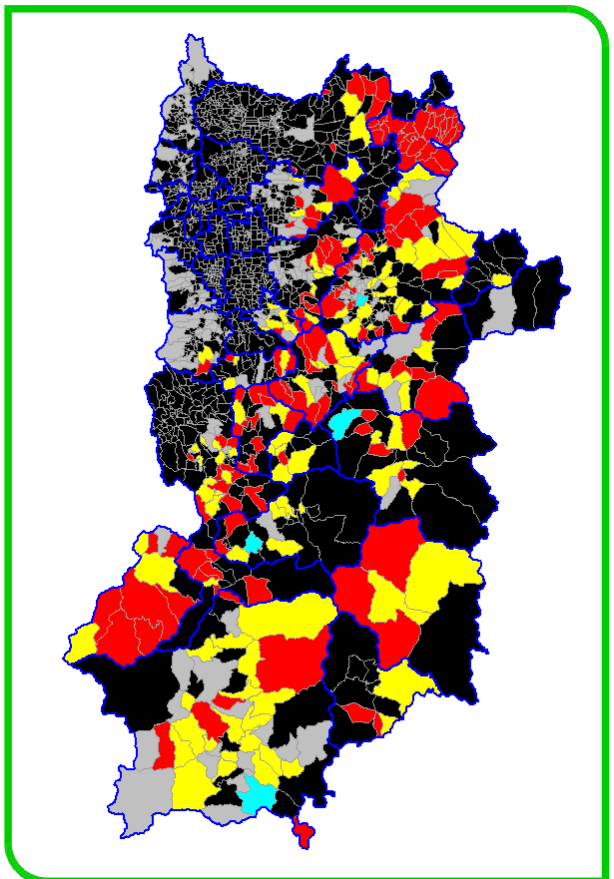
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった集落の内訳は下記の通りである。

被害は前年度と比べて、「増えた」と回答しているものが約52%に上り、「減った」と回答しているものは、わずか約4%であった。多くの地域では被害が減少していないことがわかる。

・平成28年度	
■ 増えた	196集落 (52.0%)
■ 変わらない	165集落 (43.8%)
■ 減った	16集落 (4.2%)
回答数	377集落

参考)平成27年度	
■ 増えた	203集落 (59.9%)
■ 変わらない	118集落 (34.8%)
■ 減った	18集落 (5.3%)
回答数	339集落

5. シカの林業被害の増減



左図は平成28年度の林業集落アンケートによる、林業被害の前年と比較した被害増減の意識調査の結果である。

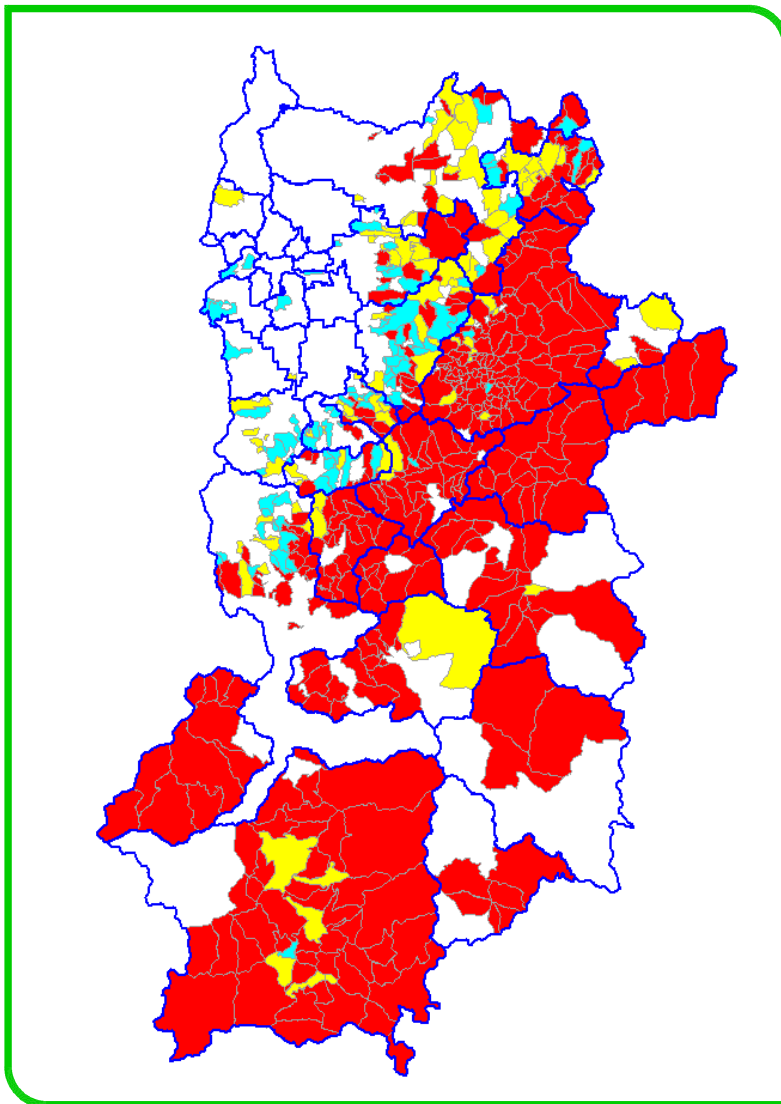
シカが「いる」と回答があり、かつ本設問の回答があった集落の内訳は下記の通りである。

被害が前年度と比べて、「増えた」と回答しているものが約56%に上り、「減った」と回答しているものは、わずか約2%とであった。多くの地域では被害が減少していないことがわかる。

・平成28年度	
■ 増えた	150集落 (56.2%)
■ 変わらない	112集落 (41.9%)
■ 減った	5集落 (1.9%)
回答数	267集落

参考)平成27年度	
■ 増えた	137集落 (59.1%)
■ 変わらない	88集落 (37.9%)
■ 減った	7集落 (3.0%)
回答数	232集落

6. シカの農地・集落周辺への出没動向(平成24～28年度の5年間の動向)



左図はシカの農地・集落周辺への出没の、5年間の動向である。

毎年集落毎に農地・集落周辺へのシカの出没を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。

そして、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色つけた。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した5年間、シカがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカの農地・集落周辺への出没は、県北部の奈良市の一部、県東部の宇陀地域から県南部の吉野郡にかけて多くなっている。近年分布が拡大した県北部や奈良盆地周辺地域では、出没はまだ少ないようである。

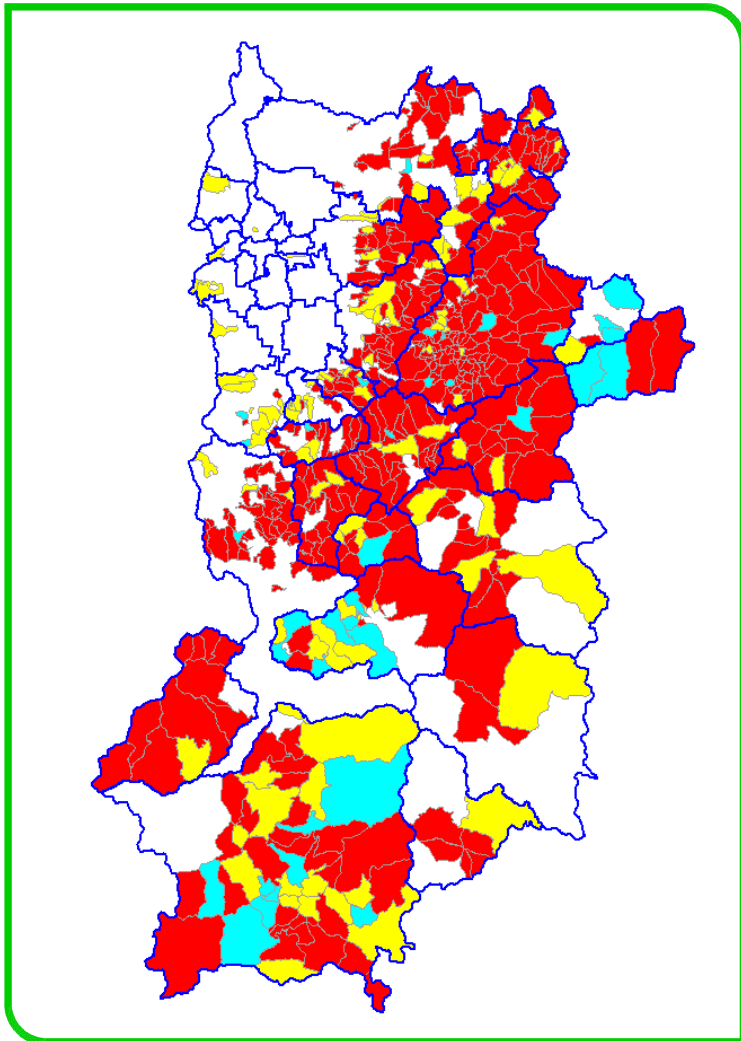
・平成28年度までの5年間

よく見る	372集落(66.4%)
たまに見る	95集落(17.0%)
あまり見ない	93集落(16.6%)
回答数	560集落

参考)平成27年度までの5年間

よく見る	370集落(64.8%)
たまに見る	102集落(17.9%)
あまり見ない	99集落(17.3%)
回答数	571集落

7. シカの農業被害意識の動向(平成24～28年度の5年間)



左図はシカによる農業被害の意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に農業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。

そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、-1以下の場合(つまり減った場合)は青色で各集落を色つけした。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した5年間、シカがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカによる農業被害の意識は、一部では減っているとなっているものの、県北東部や宇陀地域から県南部の吉野郡にかけての広範囲では、増えたとなっている。また、農地・集落周辺への出没動向では「あまり見ない」という集落が多い県北部や奈良盆地周辺地域においても、農業被害の意識は「増えた」という認識が多くなっている。

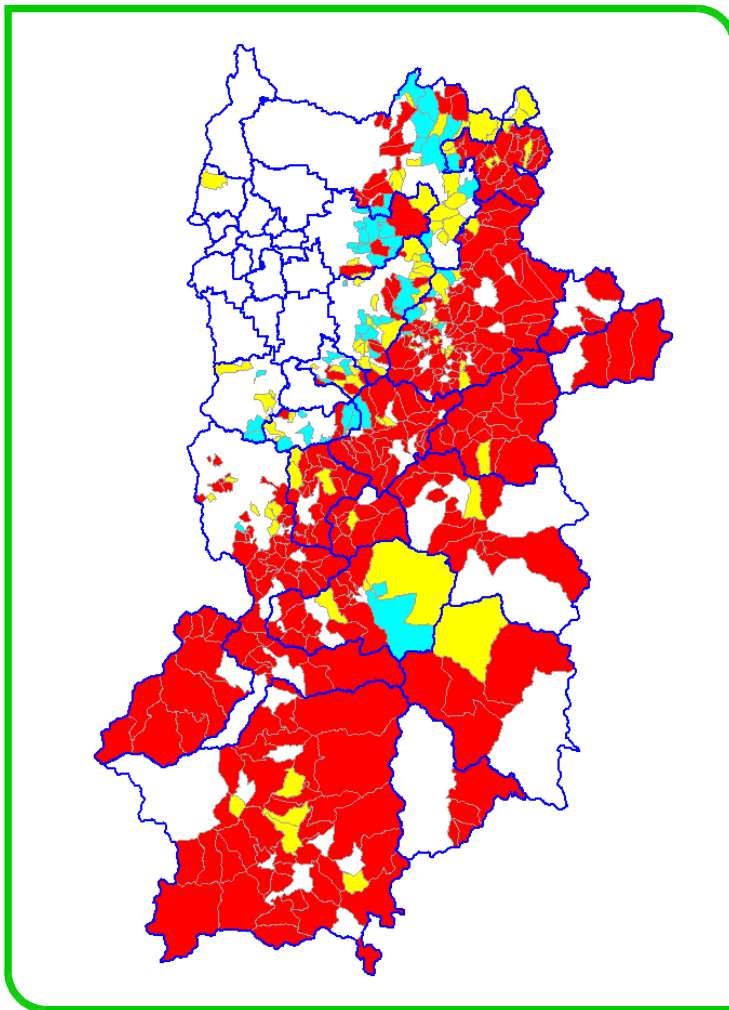
・平成28年度までの5年間

■ 増えた	406集落(73.4%)
■ 変わらない	112集落(20.3%)
■ 減った	35集落(6.3%)
回答数	553集落

参考)平成27年度までの5年間

■ 増えた	435集落(76.9%)
■ 変わらない	99集落(17.5%)
■ 減った	32集落(5.6%)
回答数	566集落

8. シカの山林・奥地森林での出沒動向(平成24～28年度の5年間)



左図はシカの山林・奥地森林での出沒の5年間の動向である。

毎年集落毎に山林・奥地森林でのシカの出沒を1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの区分で回答を得ている。そして、1. よく見る、2. たまに見る、3. あまり見ないの回答を、「よく見る」を+1、「たまに見る」を±0、「あまり見ない」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、+1以上の場合(つまりよく見るが多い場合)は赤色で、0になる場合(つまりたまに見るになる場合)は黄色で、-1以下の場合(つまりあまり見ないが多い場合)は青色で各集落を色づけした。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した5年間、シカがいない、無回答、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカのシカの山林・奥地森林での出沒は、農地・集落周辺での出沒と同様に、県北部奈良市の一部、県東部の宇陀地域から県南部の吉野郡にかけて多くなっている。近年分布が拡大した県北部や奈良盆地周辺地域では出沒はまだ少ないようである。

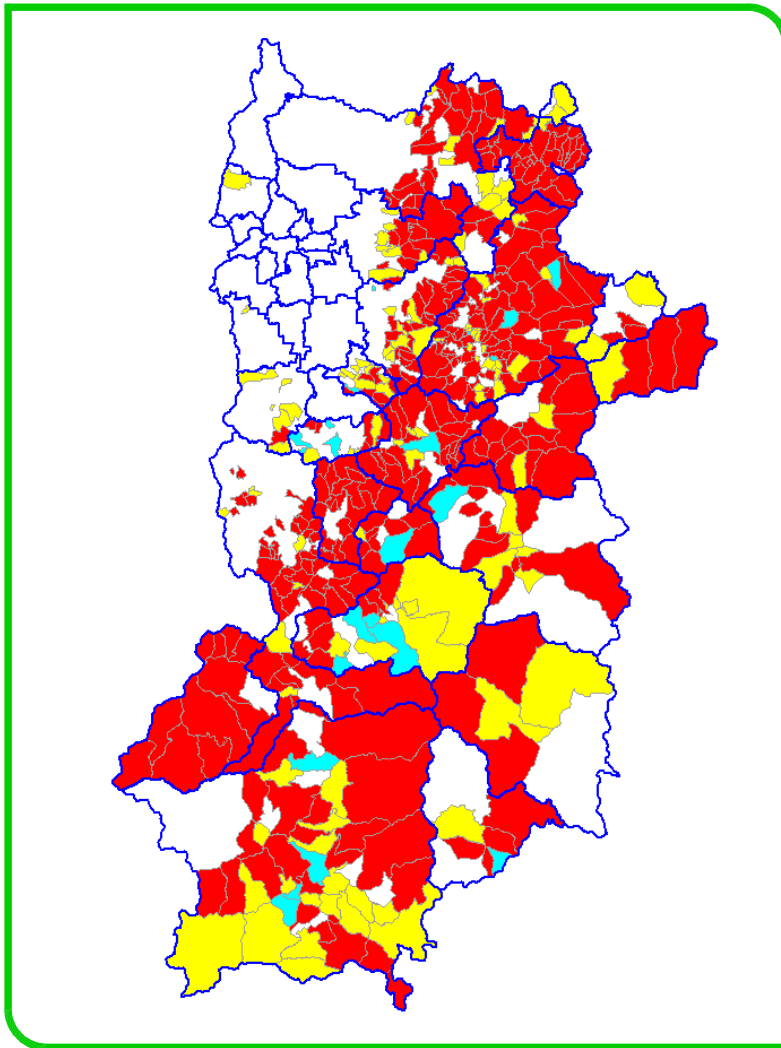
・平成28年度までの5年間

よく見る	328集落(69.0%)
たまに見る	90集落(19.0%)
あまり見ない	57集落(12.0%)
回答数	475集落

参考)・平成27年度までの5年間

よく見る	338集落(62.3%)
たまに見る	120集落(22.1%)
あまり見ない	85集落(15.6%)
回答数	543集落

9. シカの林業被害意識の動向(平成24～28年度の5年間)



左図はシカによる林業被害の意識の5年間の動向である。

毎年集落毎に林業被害を前年度より1. 増えた、2. 変わらない、3. 減ったの区分で回答を得ている。そして、「増えた」を+1、「変わらない」を±0、「減った」を-1とポイント化し、それを集落毎に合計し、プラスになる場合(つまり増えている場合)は赤色で、0になる場合(つまり変わらない場合)は黄色で、マイナスになる場合(つまり減った場合)は青色で各集落を色つけした。5年間で1度でも回答があった場合を集計している。

空白は調査した5年間、シカがいない、回答がない、集落に人が住んでいないのいずれかである。

シカによる林業被害の意識は、概ね農業被害の意識と同様に、県北東部や宇陀地域から県南部の吉野郡にかけての広範囲で「増えた」となっている。また、農地・集落周辺への出没動向では「あまり見ない」となった県北部や奈良盆地周辺地域においても、林業の被害意識は「増えた」という認識が多い。

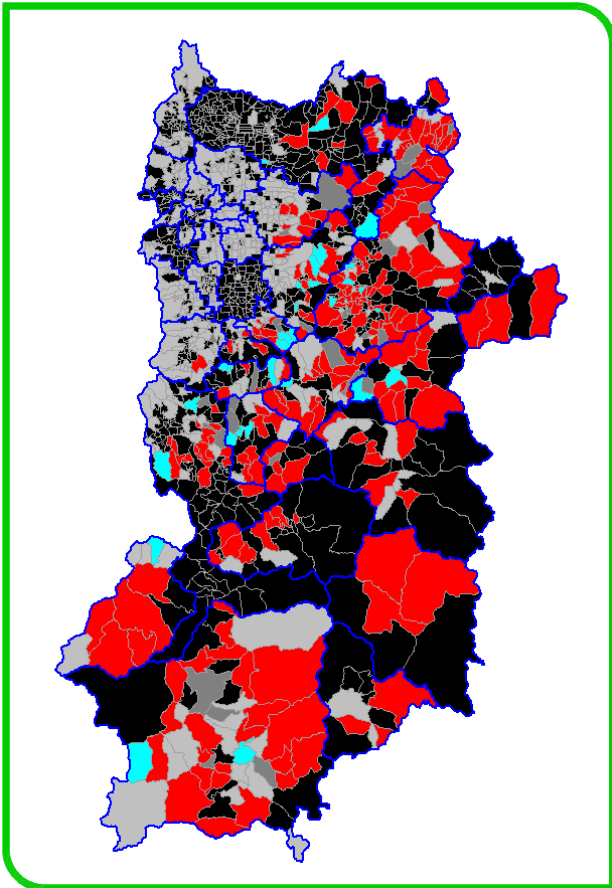
・平成28年度までの5年間

■ 増えた	352集落(71.4%)
■ 変わらない	120集落(24.3%)
■ 減った	21集落(4.3%)
回答数	493集落

参考)平成27年度までの5年間

■ 増えた	359集落(70.8%)
■ 変わらない	130集落(25.6%)
■ 減った	18集落(3.6%)
回答数	507集落

10. シカの被害対策 侵入防止柵(防護柵)の効果(平成28年度・農業)

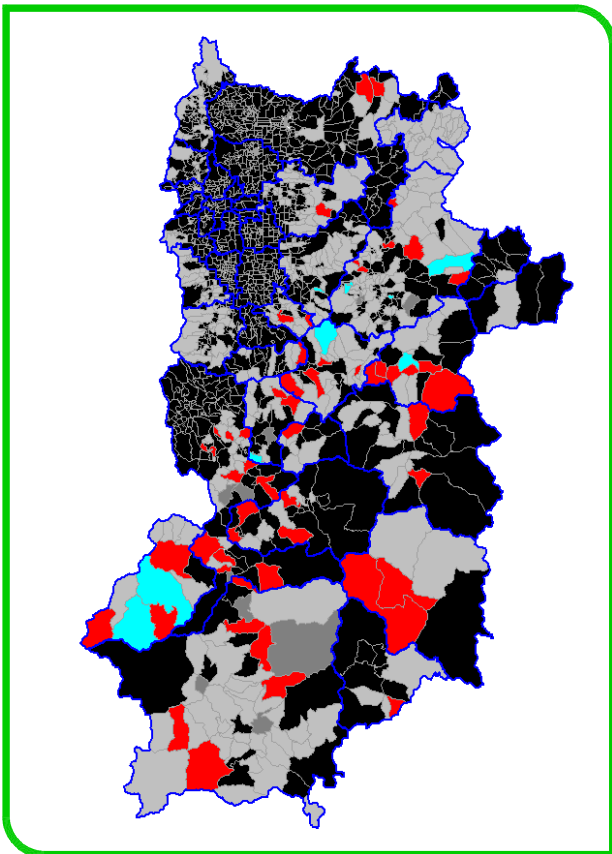


左図は平成28年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、シカ侵入防止柵(防護柵)の効果の意識調査の結果である。

本年度は回答のうち約89%が効果があったとしており、侵入防止柵を設置することによる被害防止効果は、非常に高いことがわかる。

■ 効果があった	231集落 (88.5%)
■ 効果がなかった	30集落 (11.5%)
回答数	261集落

11. シカの被害対策 侵入防止柵(防護柵)の効果(平成28年度・林業)



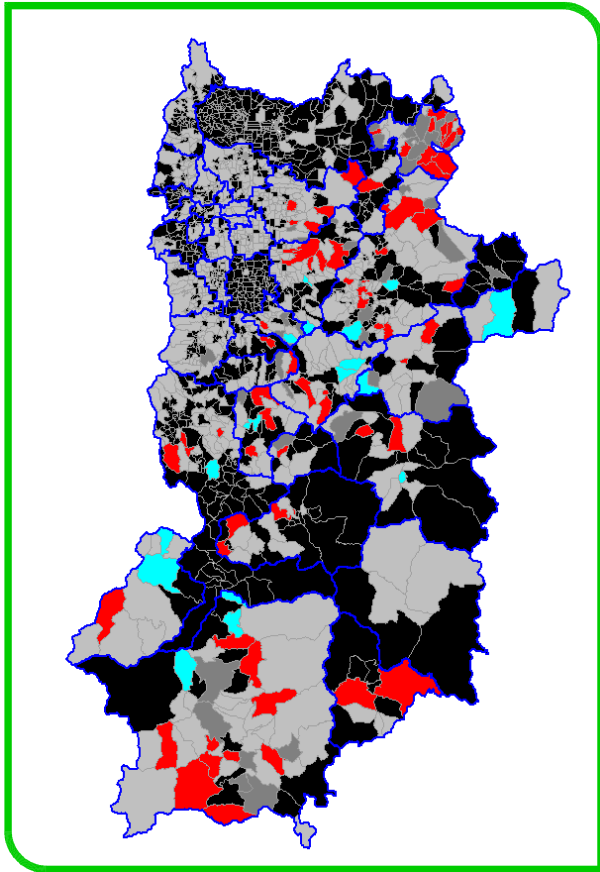
左図は平成28年度の林業集落アンケートによる、林業被害対策の、シカ侵入防止柵(防護柵)の効果の意識調査の結果である。

回答のうち約84%が効果があったとしており、侵入防止柵を設置することによる被害防止効果は、高いことがわかる。

■ 効果があった	52集落 (83.9%)
■ 効果がなかった	10集落 (16.1%)
回答数	集落

毎年度、農業に比べて、効果があったとの回答がやや少ない。これは、農業は居住地近くで営まれることが多く、人目にふれやすいため、その効果も目につきやすいこと。侵入防止柵の効果を最大限発揮させるためには見回り・メンテナンスによる破損の防止が重要であるが、山林・奥地森林で頻繁に見回りを実施できないため、破損が多く生じ、シカの侵入を許すことが農地よりも多いためと考えられる。

12. シカの被害対策 有害捕獲の効果(平成28年度・農業)

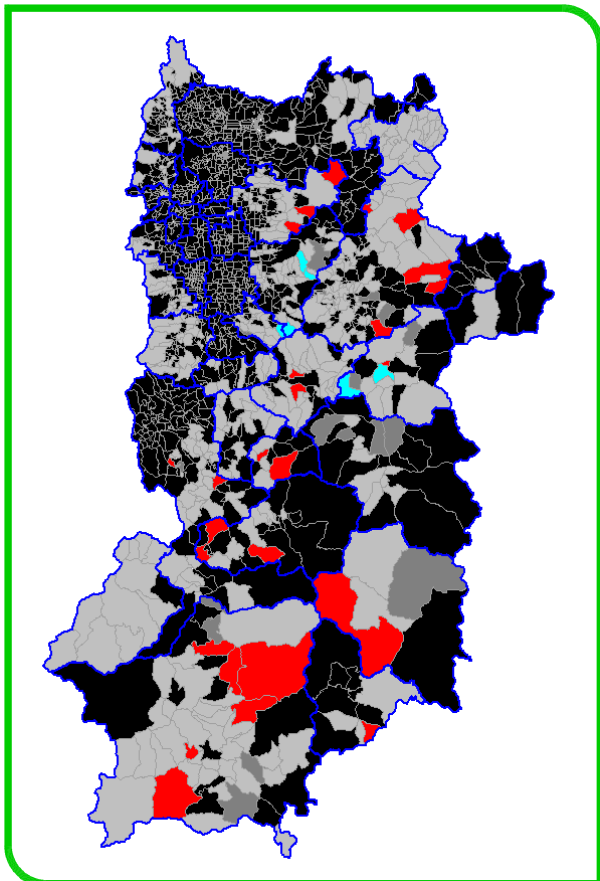


左図は平成28年度の農業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

回答のうち約80%が効果があったとしており、有害捕獲の効果は高いことがわかる。

■効果があった	68集落(80.0%)
■効果がなかった	17集落(20.0%)
回答数	85集落

13. シカの被害対策 有害捕獲の効果(平成28年度・林業)



左図は平成28年度の林業集落アンケートによる、農業被害対策の、有害捕獲を実施した効果の意識調査の結果である。

■効果があった	25集落(80.6%)
■効果がなかった	6集落(19.4%)
回答数	31集落

一般的に、林業では農業に比べて、効果があったという回答は少なくなる傾向にある。それは農地で有害捕獲を実施した場合、追い払い効果もあるため、出没しなくなった場合など人目にその効果は人目につきやすいが、山林では追い払い効果も低く、効果があっても非常に目につきにくいためである。本年度調査では、農業より効果があったという回答は多くなった(件数が少ないことに留意する必要)。

有害捕獲は、狩猟と併せて、生息数を低減させることで、被害も低減させようとするものである。生息数を低減させるために必要な捕獲数に達しない場合には、その効果が現れにくい。従って被害を低減させるためには更なる捕獲数の増大が必要である。

なお、侵入防止柵等の被害対策と組み合わせることで、より効果的に被害を低減させられるため、両者は併用しながら実施しなければならない。